

月刊 建設

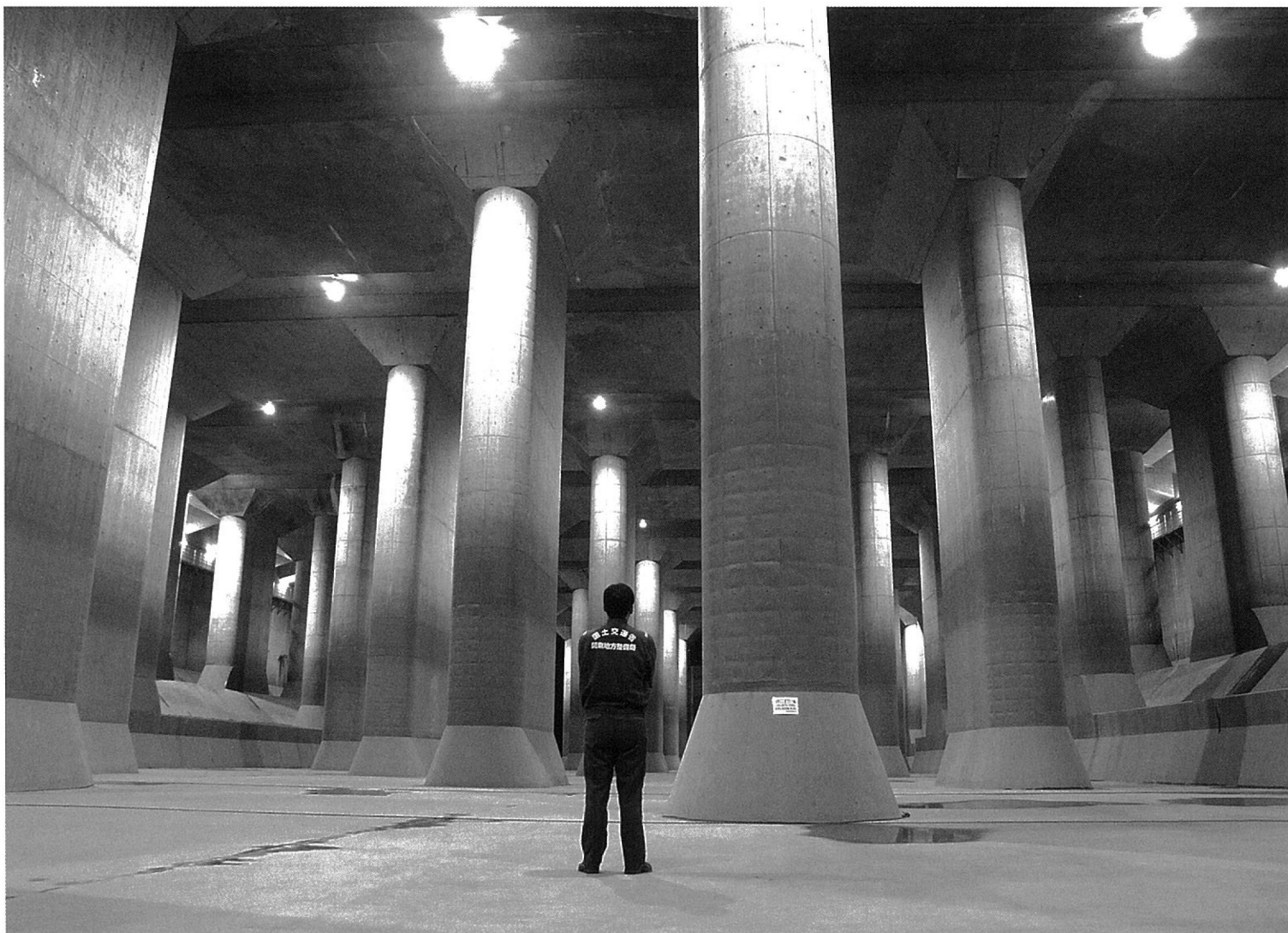
2015
Vol.59

9

特集 地域活性化の推進

地方創生の推進について

—地方におけるまち・ひと・しごとの創生に向けた取組みの推進



国土交通省 首都圏外郭放水路(埼玉県 春日部市)

一般社団法人 全日本建設技術協会
Japan Construction Engineers' Association

河川空間を使いこなした水辺の未来創造

たなか りか*
田中 里佳*

水辺空間を賢く使い、地域の資源としてのポテンシャル・魅力を最大限引き出す取組みが各地で進んでいる。人々を惹きつけている水辺はどのように生まれたのか、また、最近動き始めた地域がどのように河川空間を使いこなそうとしているのかを紹介する。

1. はじめに

我々の生活は、歴史、文化、自然、さまざまな観点で水辺と密着しており、水辺から多大な恩恵を受けてきた。しかし、急激な経済成長を経た日本社会の中で、人々の生活や意識から水辺は遠ざかってしまった。

近年、各地で水辺が持つ本来の価値に気づき始め、改めて水辺を生活の中に取り入れようとする取組みが始まっている。水辺が持つ豊かな自然や美しい風景を活かし観光により地域振興を図ろうとする取組みや、河川敷地占用許可準則の規制緩和を活用した民間事業者によるオープンカフェやレストランの outlet 等の事例について紹介する（写真-1）。



写真-1 河川敷地占用許可準則の規制緩和を活用したレストラン（元安川（広島市））

2. 水辺を使いこなす

(1) 水辺から生まれるエネルギー（大阪）

大阪の水辺が、「水都大阪」の名にふさわしく、

近年大きな変化を遂げているのをご存じの方も多いかと思う。特に、中之島付近や道頓堀の水辺は、以前とは全く違う姿で人々を惹きつけ、進化し続けている。

現在のエネルギーあふれる道頓堀川の水辺は、ハード整備とソフト対策を組み合わせることにより実現している。

ハードとしては、平成25年3月までに約1kmの区間で、大阪市により水面に近い遊歩道「とんぼりリバーウォーク」の整備が実施された。この整備の進捗に合わせ、大阪市は道頓堀川における占用主体について、民間事業者も対象とし、遊歩道の管理運営業務を行う事業者の公募を開始した。管理運営業務は、警備業務と清掃業務を主とする維持管理業務ととんぼりリバーウォークを活用したイベント、カフェ等の誘致等を行う販賣創出に関する業務から構成される。公募により南海電鉄株式会社が選定され、平成26年度は90回のイベント開催、17件のオープンカフェの設置が実現し、年々その数は増加している。さらに、川側に人々の流れが生まれたことにより、入り口を川側に向ける店舗も増加している。また、道頓堀にある船着場は、市内河川を巡る定期航路等が就航し、とんぼりリバーウォークの販賣創出と相まって、近年、船着場の利用回数が着実に増加している（写真-2、図-1、2）。

水都大阪全体の取組みとしては、行政及び経済界、

*国土交通省 水管理・国土保全局 河川環境課 課長補佐



写真-2 道頓堀の水辺空間(上:取組み以前、下:取組み後)

有識者で構成される意思決定機関である「水と光のまちづくり推進会議」、民主導の「一般社団法人 水都大阪パートナーズ」と、その活動を支える大阪府と大阪市の行政の一元的な窓口「水都大阪オーソリティ」により推進されている。水辺に関わるステークホルダーによる組織を立ち上げ、それぞれの立場も踏まえつつ、同じ方向を向いて知恵を出し合うことによる柔軟な水辺の使いこなしが実現させたのが大阪である。水都大阪パートナーズは、民間企業や地域住民、行政をつなぎ合わせ、コーディネーターとして活躍するとともに、アートや食と連動した新しい水辺空間の活用を展開している。

ポイントは、「水都大阪オーソリティ」により縦割りを越えて規制緩和等も含めた民間活動支援の事務を行うことができること、また、「水都大阪パートナーズ」により、行政の予算を原資に民間活力で付加価値を創出しているということであろう。道頓堀川における維持管理業務委託も、民間のアイデア・ノウハウにより水辺に付加価値を創出しており、共通の思想が流れている。

本年10月にはミズベリング世界会議in大阪の開催が予定されており、全国に向けての情報発信も担っている。また、新しいことにチャレンジし続ける大阪が、世界の知恵と工夫を得て、今後さらにどのように発展していくのかが注目される。

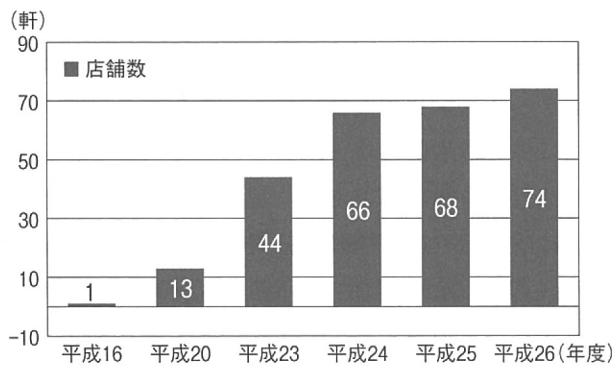


図-1 入り口が河川側を向いている店舗数の推移

3. 水辺を使いこなしたい

先に紹介した大阪は我が国の水辺活用のトップランナーの一つであるが、近年、それに続く取組みが全国でも生まれつつある。

(1) おしゃれな水辺を福井に

福井県越前市日野川では、毎年8月、3日間だけ河川敷にとってもおしゃれな空間が出現する。その名も、「おしゃれなり・BAR」。

こだわりは、実際に地元でレストランやBarを営業している店舗に出店してもらうこと。本格的な食事をゆったりと楽しんでもらう空間をつくり出している。設置されたバーカウンターから目を上げると、日野川の流れの先に福井の山々の景色が広がっている。また、日中は、子どもたちの川流れ体験等も行

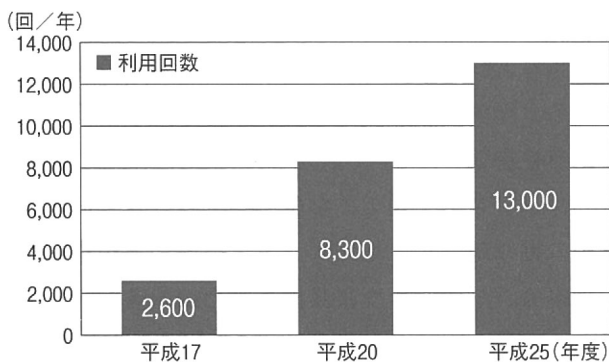


図-2 観光遊覧船の船着場利用回数の推移



写真-3 おしゃれなり・BAR

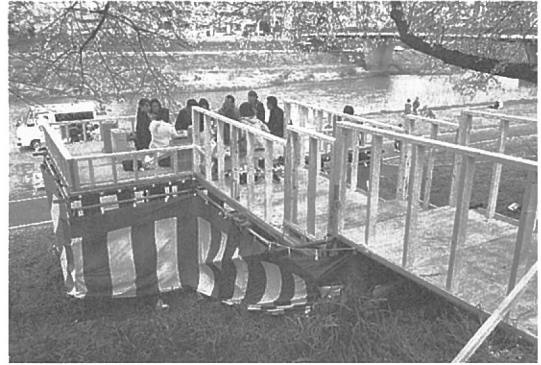


写真-5 足羽川の川床の試行



写真-4 リバービジネスのPRチラシ

われている。その間、大人はゆったりとした時間を楽しむことができるという仕掛けだ。

ここでの取組みのポイントは、他では経験できない「本物」を味わえることだろう。雄大な自然と美味しいお酒と食事に音楽、最高に心地よい空間ではないだろうか。今年は、ふくいのエコグリーンツーリズムとして、「枝豆収穫・MYうちわで リ・BARへGO!」ツアーに、農家で枝豆収穫やうちわ作り等を体験した後に、おしゃれなり・BARが組み込まれた。

また、この河川敷空間に仮設大型テントの埋設型アンカーを越前市が設置することを決めるなど、流域行政も変わり始めた。

これからの、川のあるまちづくりの進め方として、新しいリバービジネスがまちづくりの軸となる可能性は大きい(写真-4)。

これに手応えを得た主催者の一人は、^{あすわ}足羽川での川床を構想中である。

川床は、おしゃれなり・BARとは異なり常設の構造物を設置するため、河川敷地占用許可準則第20条の規制緩和の適用が必要である。今年3月のイベントの際には、試行的に川床を設置した(写真-

5)。今後、本格適用に向けた関係者調整を行う予定である。

(2) 周囲を巻き込みながら進む富士川

山梨県富士川水系でも、笛吹市及び富士川町の2市町におけるかわまちづくりが登録され、それぞれの地域において特色のある取組みが進められようとしている。

笛吹市では、「笛吹市ミズベリング構想」を踏まえ、近津用水での川床の整備や石和温泉街での水辺公園整備等により、水辺のレクリエーション軸の形成等を計画している。

また富士川町では、道の駅や中部横断自動車道のインターチェンジの整備による、新たな交流拠点の誕生に併せ、水防拠点・水辺整備とまちづくりを一体的に行う計画としている。この水辺整備エリアの目前には病院や福祉施設も位置しており、医療・介護の観点から水辺が有するポテンシャルをいかに活用できるかを議論する、全国初のミズベリング・メディカル懇談会が開催された。入院中の方が利用できる散策路や憩いの場や子供が遊べる水場等、医療従事者の視点をかまちづくりに活かす取組みが始まっている(写真-6)。

さらに、富士川水系では、観光業界との連携も進んでいる。全国の大学生が自ら構想した観光まちづくりプランを競う「大学生観光まちづくりコンテスト」は、コンテストを通じ、学生への実践的教育、地域資源の掘り起こし、地域ビジネス振興の実現を期待している。平成27年度に設置された山梨ステージでは、「ミズベリングと連動した富士川水系流域の「観光まちづくりプラン」」をテーマとした企画の募

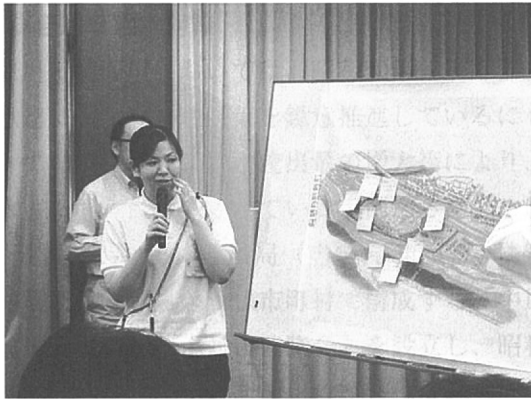


写真-6 ミズベリングメティカル懇談会



写真-7 近津用水での水辺で乾杯

集が開始された。富士川水系の水辺が有するポテンシャルをいかに見つけ発展させるか、他地域も含めた大学生の若く新しい感性と視点から、どのような企画が提案されるのか、たいへん興味深い。

また、7月7日には、笛吹市石和温泉で近津用水を活用した乾杯イベントを実施し、観光客を巻き込んだ新しい水辺の過ごし方を見つける取組みを行ったところである（写真-7）。さらに、上流にある昇仙峡においても、歴史ある景勝地の新たな水辺活用を見つけるミズベリング会議を開催する予定である。

このような動きを支えるには、そこで継続的に動く人材が必要である。この地域では自治体、大学、旅行会社等が参画した「富士川水系ミズベリング研究会」を発足させ、先のコンテストも研究会参加の自治体、旅行会社等とのコラボレーションにより実現している。

この研究会は、富士川水系の水辺とまちの未来を創造していくための取組みを推進していくためミズベリングに関する情報を関係者で共有し、産官学と

の連携のあり方と人材活用方策について調査・研究を行うことを目的としている。水辺にはさまざまなステークホルダーが関わっており、継続的な水辺の活用を行うためには、核となり周囲をまとめるファシリテーターとしての役割を果たす人材や、各分野で責任を持ち水辺を活用する人材がいることが重要な要素となる。人材育成を主眼に置く、全国的でも初めての取組みであり、今後の活動に期待したい。

4. おわりに

ここで紹介した地域に共通しているのは、川と真剣に向き合い、変えようともがいている「人」がいることだろう。

きっかけをつくる人は、地域の中の人、外からその地域に来た人など、さまざまである。それぞれの視点でその地域の水辺の楽しさ、美しさ、気持ちよさを発見し、使いこなす工夫をし、さまざまなかたちで関係者を巻き込み地域を盛り上げている。

平成26年3月から開始されたミズベリング・プロジェクトは、水辺を使いこなす取組みを行っている地域や人を応援するとともに、それらをつなぎ、増やすための取組みを行っている。

河川と人々の暮らしを再びつなげる取組みが各地で展開され、それが続くよう、引き続き全国の取組みを丁寧にフォローしていきたい。